

私の一冊

こども学科 藤田 雅也 先生

岡田淳 著 『図工準備室の窓から 一窓をあければ子どもたちがいた』

小鹿図書館 914.6/O 38

作者の岡田淳先生は、児童文学作家であり、教師です。岡田先生は、大学卒業後から38年間、図工専任教師として兵庫県西宮市の小学校に勤務されました。『図工準備室の窓から 一窓をあければ子どもたちがいた』(偕成社/2012年)には、その38年間のさまざまな出来事の中から、40の話が綴られています。図工の授業の話もありますが、主に図工の授業の「周辺のこと」、出会った子どもたちや同僚との何気ない日常の話が中心です。あとがきには、「思えば、しあわせな図工の先生の日々だった」と振り返られており、岡田先生の温かい人柄と子どもへの眼差しが伝わってきます。

岡田先生が描く児童文学作品の多くは、学校での出来事が中心です。そして主人公は子どもたちや先生です。本書には、それらの作品と関連するエピソードが数多く登場します。また、生み出された物語の背景には、子どもたちとの出会いが大きく影響していたことが分かります。副題には「窓をあければ子どもたちがいた」とされていますが、岡田先生と出会った子どもたちにとっては「窓をあければ先生がいた」という安心感や喜びが存在していたようにも感じます。

私が岡田先生の作品に出会ったのは、小学生の頃です。図書室で偶然借りた岡田先生の作品『学校ウサギをつかまえろ』(偕成社/1986年/日本児童文学者協会賞)に出会って、夢中になって読んだことを今でも覚えています。代表作には、『ムンジャクンジュは毛虫じゃない』(偕成社/1979年)、『放課後の時間割』(偕成社/1980年/日本児童文学者協会新人賞)、『二分間の冒険』(偕成社/1985年)、『びりっかすの神さま』(偕成社/1988年)、『星モグラ サンジの伝説』(理論社/1990年)などがあり、いずれも小学生の頃に、その物語の世界に没頭した記憶があります。子どもから大人までが楽しめる文学作品です。

本書を読んで、今改めて小学2年生の息子と一緒に岡田先生の作品を読み返しています。30年ほど前の気持ちがよみがえってきます。いい作品は、時代が変わっても、ワクワクドキドキできるものであると改めて感じます。

「思えば、しあわせな図工の先生の日々だった」と自分の生き方を振り返れるように、人との出会いを大切にしながら、今日の前にある、しあわせな日々を噛みしめたいものです。これからの未来をきり拓く、すべての皆さんに読んでいただきたい一冊です。